

# キャリア教育の視点を持った進路指導の充実

—M-GTA による中学校教員の語りの分析—

富田 幸子・赤井 悟

Enhancement of Career Guidance from the Perspective of Career Education:

Analysis of Junior High School Teachers' Narratives Using M-GTA

TOMITA Sachiko and AKAI Satoru

**Abstract:** Career guidance in middle schools is a great responsibility. We interviewed junior high school teachers about how they deal with career guidance and analyzed the results using the M-GTA method. According to the results, in the career choice process for third-year junior high school students, some students were able to explore their own career paths and make self-decisions, while others were unable to wait for their own ideas to come to them and had difficulty making self-decisions. In the case of students who had difficulty, the intentions of cram schools and parents had a significant impact on their career decisions, and in some cases, teachers had difficulty in providing career guidance. Career education may influence self-determination when choosing career path. It is considered necessary for teachers themselves to deepen their awareness of career education, by having a career education perspective in their daily activities and establishing a system within the schools.

**Key Words:** career guidance, career education, special activities, junior high school teachers

**要旨：**中学校の進路指導は大きな責任を伴うものである。中学校教員は進路指導とどう向き合っているのかについて、インタビューを行い、M-GTAの方法で分析した。それによると、中学3年生の進路選択では、自己の進路を探索し自己決定ができる生徒と、自分の考えが待てず自己決定が難しい生徒がいた。自己決定が難しい生徒の進路決定では、塾や保護者の意向が大きな影響を持ち、時には教員の進路指導が困難になるケースもあった。進路選択時の自己決定に影響を及ぼすと考えられるものとしてキャリア教育がある。日常活動の中にキャリア教育の視点を持つこと、学校体制を確立すること等、教員自身がキャリア教育への認識を深める必要があると考えられる。

**キーワード：**進路指導、キャリア教育、特別活動、中学校教員

## 1. はじめに

中学校教員の大きな役割の一つに、生徒たちに将来に向けて希望をもった進路選択をさせるということがある。小学校から中学校卒業まで、エスカレート式に上の学年へと進んできた生徒たちは、中学校3年生になって初めて自己の進路を選択する時を迎える。この

初めての進路選択に対して生徒たちが抱く不安は大きく、それに関わる教員の役割は重要である。

進路指導は「生徒が自らの生き方を考え、将来に対する目的意識を持ち、自分の意思と責任で自分の進路を選択決定する能力・態度を身に付けることができるよう、指導・援助すること」とされる（文部科学省2004）。日頃の人間関係をベースに、子どもへの保護者の思いや生徒本人の考えに向き合いながら、教員は

進路指導を行う。しかしながら、中には、進路選択の際に自己の考えが持ちきれず、保護者等の思いに従う生徒もみられる。自らの考えがなく自己決定ができない生徒を前にした時の進路指導は、教員にとって困難を極めるものである。

そうした進路選択時の自己決定に影響を与えるものとして、自分の生き方を問うキャリア教育がある。平成 23 年の中央教育審議会において、キャリア教育は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義された（中央教育審議会 2011）。平成 29 年の中学校学習指導要領の中では、キャリア教育は特別活動を要としつつ学校教育全体を通して適切に行うものとされている（文部科学省 2017）。

これらを受け、昨今の中学校において 3 年生時の進路指導だけに重点を置くのではなく、1・2 年生時より様々な取組を通じて、働くことの意味、将来に向けての生き方そのものを考えさせる取組がなされている。

このような 1 年生からのキャリア教育の充実、3 年生時の自己決定が必要な進路選択にむけて、今後も重視されていくだろう。ただ、高校に提出する調査書の評価方法の変更、高校の校名の変更、新しいコースの創設等、高校進学時に考慮しなければならない事項に目まぐるしい変化があり、教員は進路に関する新しい情報収集に追われる現状がある。

そこで、本研究では、進路選択が多様化する中、教員は生徒たちの進路選択にどんな思いを持ち、どう関わっているかを整理するとともに、進路決定に影響すると考えられるキャリア教育をどのように捉えているかについても明らかにする。

## 2. キャリア教育の実際

中学校では 1・2 年生のキャリア教育として様々な取組が実施されている。

具体的には、保護者等身近な人の仕事についてのインタビュー、将来の生活設計を考える学習、働くことの意義についての学習、資格や職に就くためのプロセスの学習、履歴書の作成、模擬就職面接等多種多様である。

なかでも、中学校 2 年生時に取り組まれる職場体験学習は、生徒自らが交渉して働く職場を探し、数日間職場に出向き仕事を体験するもので、「働く」ことの

表 1 調査対象の属性

Info.	教員歴	進路指導歴
A	20 年未満	5 回
B	25 年未満	5 回以上
C	20 年未満	3 回
D	30 年未満	5 回以上
E	15 年未満	4 回
F	5 年未満	1 回
G	10 年未満	3 回
H	15 年未満	4 回
I	5 年未満	1 回

意味を考える機会となる。令和元年度、公立中学校における職場体験学習の実施率は 97.9% と、ほとんどの中学校において実施されていたが（国立教育政策研究所 2019）、コロナ禍の中、令和 2 年より中止となっている実態がある。課題として、受け入れ先が減少する中で実施が難しいだけでなく、体験の中身そのものが職場によって差異がある点も指摘されている。

それに替わるものとして、外部の人材をゲストティーチャーとして招き、様々な職種の仕事の内容、やりがいや苦勞を話してもらう取組に重点をおく学校は多い。外部講師による職業講話は、普段知らない仕事を知る機会となり自己の進路に繋がるケースもみられる。

さらには、キャリア教育の教材を新しく開拓し新しい取組へ挑戦する動きもある。企業が設定する職業学習プログラム、キャリア教育として活用できるビデオ教材の活用である。例えば、NHK ティーチャーズ・ライブラリー「にんげんどキュメント 大人ってすごい! ~14 歳の職場体験」という映像教材では、職場体験の受け入れ側が、中学生を 1 人の社会人として接し、何を体験させ何を伝えられるのかを真剣に考えていること等、社会で働く大人の思いが伝えられている。遅刻や無断欠勤が仕事上の信用失墜になること、学校とは違い仕事とは完璧を求められること、華々しい仕事の裏側に自分なりの勉強や真剣な努力があること等、働く意味を考える学びを与えてくれる。

3 年生のキャリア教育は、進路学習がメインである。進路学習は 3 年生からスタートするのではなく、1・2 年生より高校入試の仕組みの他に、普通科だけではなく工業科や農業科といった幅広い選択肢に触れるなど、早くから進路決定にむけての意識づくりに取り組む学校が増えている。ここでは、生徒の学習に対

する姿勢の変化や、進路が身近になることをねらいとしている。

### 3. 研究の方法

#### 3.1 対象及び実施時期

本研究は、公立中学校5校に勤務する中学校教員9名を対象に調査を行った。調査実施時期は2022年8月5日～17日の1週間である。9名のうち、進路指導が初めてという教員は2名で、その他の教員は数回進路指導を経験している。(表1)

#### 3.2 調査手続き及びデータ収集上での配慮

調査はインタビュー(半構造化面接)で実施した。インタビューは1人40分から90分で、合計8時間8分であった。コロナ禍を考慮し、1対1のZoomを活用してのインタビューとした。インタビューの際には、収集するデータは、教員が進路指導においてそれぞれどのようなところに問題を抱えているかを明らかにし、今後の進路指導に生かす研究に使用するという趣旨を説明し、各個人が特定されないよう配慮する旨を伝えた。また、メモをとることとビデオ撮影することの許諾をとり、後日逐語化した。

#### 3.3 調査内容

9名の教員に、①進路指導をどう捉えているか、②生徒の進路決定までに与える影響などに関連する5項目について述べてもらった(表2)。

### 4. 分析の手順及び配慮

今回の研究は、A市B市の中学校教員を研究対象としているため、ローカルな範囲における仮説的理論を作り上げるのに適しているといわれるM-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)によって分析する。

M-GTAは、木下(2003)によって提唱された質的研究の方法で、データの解釈から説得力のある概念生成を行い、概念間の関連性を高め、まとまりのある理論を作るものである。具体的には、進路指導の中での教員の思いに密着して解釈を進め概念を生成する。そのあとカテゴリー、そして上位カテゴリーにまとめていくM-GTAの一般的な方法で、以下のように分析を進めた。

1. 収集した全てのデータは1度に扱わず、インタビ

表2 進路指導にどう取り組んでいるか

質問1	生徒、保護者が進路決定していく上での基準とは何か。
質問2	進路指導上、教員として心がけていること
質問3	進路指導上での困難は何か。やりがいを感じるのはどのようなことか。
質問4	進路指導を充実させるために何が必要か。
質問5	キャリア教育について感じること。

ュー順に前半5人、後半4人の2グループに分けた。

2. 初めに、Step1で5人のデータを分析し概念を抽出した。その後、Step2で残り4人のデータを分析した。最後に9人のデータすべてで再度分析を行い、Step1 Step2では抽出できなかった新たな概念をとりあげた。
3. 分析では「進路指導における教員の捉え方」に関連する箇所を取り上げ具体例とした。
4. 9名という人数であったため、具体例が2個以下という場合は概念として取りあげず、3個以上出てきた場合のみを概念として取りあげた。
5. 抽出した概念で同じもの、類似したものがないかを見比べ、同じと判断される場合1つのシートにまとめて記入し、具体例を増やした。
6. 生成した概念と他の概念の関係を検討し、概念の似たもの同士をまとめ、そのまとまりに名前をつけカテゴリーとした。更に内容的に共通の上位概念で括れる複数のカテゴリーを1つの上位カテゴリーにまとめた。
7. インタビューで、これ以上継続しても新たな結果が生まれず状況を理論的飽和とした。
8. 分析の協力を、進路指導経験を持つ教員1名にも依頼した。概念を生成する際に概念の元になる具体例が他の概念の具体例と重複していないか等、複数でチェックした。

### 5. 結果と考察

質的研究では、研究者自身の解釈が含まれ、結果と考察を分けて記述することが困難とされるため(木下2003)、初めに具体例に基づく概念とカテゴリーの分析結果をあげ、その後、概念間及びカテゴリー間での影響等の仮説プロセスと捉えられる結果と考察を記述する。

M-GTAの手法にのっとり、根拠となる具体例を元

に抽出した概念を『 』で、その上に設けるカテゴリーを【 』で、更に最上位に設ける上位カテゴリーを《 》で記すものとするが、インタビュー分析からは 20 個の概念が見いだされた (表 3)。なお、概念については、参加者のインタビューでの回答のうち代表的な具体例を「 」に記すと共に、概念の生成に関連する部分を傍線で記した。A~H のアルファベットは Info. (データ提供者) に割り当てた記号である。

更に具体例「 」の中で、概念間やカテゴリー間での影響についての仮説プロセスと捉えられる箇所は、波線及び①~⑧の上付き番号で示すと共に、結果図 (図 1) においてもその番号①~⑧及び矢印で記した。

### 5-1 進路指導の捉え方の違い

進路選択に対する考え方には、生徒・保護者・教員といった、それぞれの立場ごとに差異がみられる。

#### 5-1-1 進路への思い

高校での生活の充実を目指すためにぎりぎりでない進路選択を勧める『充実の生活』、高校卒業を目標とした『3年間の継続』、その一方で、本命以外の受験も勧める『多数受験の推奨』、生徒本人の実力より難しいところを進めがちな『難関への挑戦』という塾の傾向、進路選択では塾の意見が優先され、教員が直面する『指導の困難さ』という計 5 つの概念が抽出された。

そのうちの『充実の生活』『3年間の継続』『指導の困難さ』の 3 つの概念は、教員が進路指導をする中での思いを示すものであることから、【教員の思い】というカテゴリーに属するものとした。

『多数受験の推奨』と『難関への挑戦』の 2 つの概念は、塾の指導に関するものであることから【塾の指導の傾向】というカテゴリーに属するものとした。

概念間の動きとしては『多数受験の推奨』と『難関への挑戦』という塾の指導のあり方は、教員が望む『充実の生活』、『3年間の継続』とは対になる概念であり<sup>①</sup>、『指導の困難さ』に繋がるものである<sup>②</sup>。以下に概念ごとに具体例を示す。

#### 『充実の生活』

・基本としてはギリギリを勧めない。勉強についていけるかどうかになると他が楽しめないし、部活動もそうなりがちなので・・・。(C)

#### 『3年間の継続』

・充実した高校生活が3年間続けられるだろうという展望が持てる高校に入り、やめさせたくないという点が大きいです。(A)

#### 『指導の困難さ』

・挑戦させようとする塾の意見を聞くのは良いのですが数的根拠に欠けるアドバイスを好意的に捉えてしまつて<sup>③</sup>こちらのアドバイスに耳を傾けなかったことが大変でした。(E)

#### 『多数受験の推奨』

・塾の指導が学校と明らかに違う<sup>①</sup>というのは、あそこもここも受けるのを勧めるという点です。(B)

#### 『難関への挑戦』

・塾の指導が非常に強い地域は、ほとんどの生徒が高めに自分の実力よりも高いところを口にするというのが進路相談の初めにはあるように感じます。(E)

### 5-1-2 生徒の思い

自分で足を運びその中で感じた高校のイメージがもととなる『部活動・学校の雰囲気重視』という概念が抽出される一方、進路が自分事として捉えられない『将来への夢や考えがない現実』、という 2 つの概念が抽出された。これら 2 つの概念は、生徒の進路決定に至るまでの過程を示すものであるため【生徒による進路選択】というカテゴリーに属するものとした。『部活動・学校の雰囲気重視』と『将来への夢や考えがない現実』は対照的な意味を持つ概念である<sup>③</sup>。以下に概念ごとに具体例を示す。

#### 『部活動・学校の雰囲気重視』

・オープンキャンパスの印象、高校の雰囲気をもとに高校を決めている生徒も結構います。部活動を熱心に取り組んでいた生徒は、その学校が部活動も盛んかどうか気にしています。(F)

#### 『将来への夢や考えがない現実』

・たまに夢に向かってするにはどうしたらいいのかわかっている生徒もいるが、それはほんとう一握りです。(A)

### 5-1-3 保護者の思い

進路選択における保護者の影響は大きい。進路決定の過程で、保護者が子どもに対して抱く傾向である『偏差値志向』、高校卒業後の進路も視野に入れた選択を示す『次の進路保証』という概念の 2 つが抽出された。これら 2 つの概念は、偏差値による基準をもとにしながら将来を考えた保護者の判断であることから【親の考える基準】というカテゴリーに属するものとした。

概念間の動きとしては、保護者の考えを表すこの 2 つの概念は、前述の【塾の指導の傾向】からの影響を受けるとともに<sup>④</sup>、『将来への夢や考えがない現実』にある生徒に対しても強い影響を与えるものである<sup>⑤</sup>。

以下に概念ごとに具体例を示す。

#### 『偏差値志向』

- ・塾の勧めで落ちるかもしれないのに<sup>④</sup>、少しでも上の体裁を保ちたいのがあるのか、偏差値の高い学校受験にこだわる親が「ここくらい行ってほしい」と強く言ってるのをそのまま聞いてる感じで、本当にそこに自分の意思はあるのかと疑いたくなるような生徒も少なくなかったです<sup>⑤</sup>。(I)

#### 『次の進路保証』

- ・在学中あの勉強をさせてくれるとか、併設の大学がある等、大学進学を考えているのも大きいです。(D)

以上、5-1で生成された【教員の思い】【塾の指導の傾向】【生徒による進路選択】【親の考える基準】という4つのカテゴリーは、教員・生徒・保護者といった違う立場ごとの進路選択に対する考えが示されたものであることから、上位カテゴリーの《進路選択の捉え方の違い》に統合した。

## 5-2 進路指導の実態

進路指導は、各担任が学級の生徒に向けて行うのが基本である。進路指導の際の教員の心がけに関する概念が抽出された。

### 5-2-1 指導における教員の姿勢

生徒・保護者の意見を大切にしようとする『傾聴の姿勢』、納得のいく進路決定に欠かせないと考える『自らの決断』、偏差値だけに縛られることなく一人一人の個性や力量を見据えた指導を目指す『個に合った指導』、進路指導をする上で基本となる『信頼関係の構築』といった4つの概念が抽出された。これら4つの概念は、教員自らが進路指導を進める際に心がけているものであることから【指導における教員の姿勢】というカテゴリーに属するものとした。

概念間の動きとしては教員が大切に思う『自らの決断』は前述の進路先での『充実の生活』を導くための

ものという関連がみられた<sup>⑥</sup>。以下に概念ごとに具体例を示す。

#### 『傾聴の姿勢』

- ・本人の実力と目標にギャップがあるなら、「なんでその学校を選んだのか」と生徒の意見を聞くところからスタートです。(C)

#### 『自らの決断』

- ・保護者が決めて行きたくもない学校に行き、だから辞めたんだみたいな、行って終わりじゃないし、行った先の生活に関わることなので<sup>⑥</sup>、最後自分が納得した上で決定できるようにってのを大事にしています。(B)

#### 『個に合った指導』

- ・ギリギリで入った環境でも、なにくそと思える性格であれば頑張れる子もいます。型にはめるのでなく人の性格にもよりますね。(E)

#### 『信頼関係の構築』

- ・懇談は日頃の生徒・親と教員との関係がものをいいます。例えば「あの時わからないケースを後で調べました」と言うと信頼感があれば「先生、調べてくれて有難う」になります。信頼があるからこそ、その言葉が響くというか励ましになるように思います。(A)

### 5-2-2 校内体制

進路指導経験の浅い、若い世代の教員の困り感を示す『進路指導経験の少なさ』、そうした教員に向けてのフォローである『若い先生への支援』、進路指導を混乱させないための『全体での指導体制』という3つの概念が抽出された。これら3つの概念は、進路指導を進める上で欠かせないものであることから【進路指導体制の構築】というカテゴリーに属するものとした。

概念間の動きとしては『若い先生への支援』及び『全体での指導体制』の2つの概念は『進路指導経験の少なさ』への対応を示すものである<sup>⑦</sup>。以下に概念ごとに具体例を示す。

表3 M-GTAにより生成された概念の一覧

手順	Info.	生成した概念	概念数
Step 1	A, B, C, D, E	キャリア発達に繋げる難しさ／将来への夢や考えがない現実／3年間の継続 個に合った指導／信頼関係の構築／若い先生への支援／充実の生活 キャリア教育の位置づけ／進路指導経験の少なさ／卒業後の生活の充実 多数受験の推奨／指導の難しさ／全体での指導体制	13個
Step 2	F, G, H, I	自らの決断／傾聴の姿勢／次の進路保証／部活動・学校の雰囲気重視	4個
Step 3	全体	難関への挑戦／目標決定後の生徒の変化／偏差値志向	3個

表 4 概念表

上位カテゴリー	カテゴリー	概念	定義	具体例数
進路選択の捉え方の違い	教員の思い	充実の生活	普通に過ごし生活が充実できるかが進路選択の基準	5
		3年間の継続	3年間通うことができるか卒業できるかが重要	3
		指導の困難さ	学校の指導よりも、塾の指導を優先する進路選択	5
	塾の指導の傾向	多数受験の推奨	行きたい学校以外の受験も勧める塾の傾向	3
		難関への挑戦	実力よりも高い偏差値の学校を目指すことを推奨	3
	生徒による進路選択	部活動・学校の雰囲気重視	部活動やオープンキャンパスへの参加から感じた雰囲気をもとにした進路選択	2
		将来への夢や考えがない現実	進路に対して明確な考えがみられず、親の意向が優先に決まってくる進路選択	7
	親の考える基準	偏差値志向	実力よりも難しい学校を初めに提示する傾向	4
次の進路保証		大学の併設や大学進学を考えた上での高校選択	5	
進路指導での教員の学び	指導における教員の姿勢	傾聴の姿勢	生徒の気持ちを聞くことからスタートの教員の姿勢	4
		自らの決断	自分で進路決定するのは何より大事という考え	4
		個に合った指導	本人の性格や伸び率を考えた個々にあった進路指導	3
		信頼関係の構築	進路指導をする上で信頼関係がベースという考え	3
	進路指導体制の構築	進路指導経験の少なさ	進路指導が初めてあるいは少ない等からくる失敗や不安など	4
		若い先生への支援	経験の浅い若い先生へのフォロー、伝えたいこと	9
		全体での指導体制	担任1人でなく全員で進路指導に関わる体制の必要性	3
	進路指導のやりがい	卒業後の生活の充実	高校生活を充実させている報告を聞く喜び	7
		目標決定後の生徒の変化	目標を持ったことで、生徒の学習姿勢の改善という変化を見た喜び	3
	キャリア教育の現状	キャリア教育の課題	キャリア発達に繋げる難しさ	3年生になると入試問題が大きく、将来の生き方を考えることに繋がらない実態
キャリア教育の位置づけ			キャリア教育を学習活動にどう位置付けていくか教員の捉え方や姿勢	5

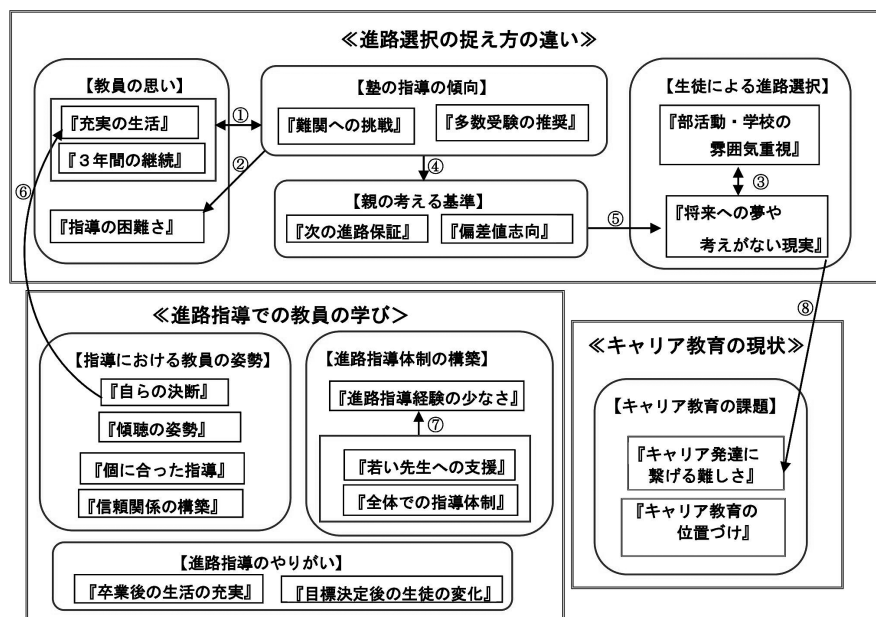


図 1 進路指導の捉え方 結果図

## 『進路指導経験の少なさ』

- ・進路変更してくるケースに、若いとか、あの先生やったら言いやすいがあり、〇〇先生の言う事やったら、聞いとこかみたいになる場合がきつとあると思う。(G)

## 『若い先生への支援』

- ・若い先生は、〇〇点だから等ただ機械的に進路指導をしているように感じます<sup>7)</sup>。模擬懇談を行うなど、もっと踏み込んで若い先生に手取り足取り具体的に支えてあげる必要があると思います。(B)

## 『全体での指導体制』

- ・進路指導は一人でするんじゃなく、学年全体で決めてるんですよ、若い先生にはそのスタンスを強めに説明しています<sup>7)</sup>。(D)

## 5-2-3 進路選択後に得るもの

卒業後も継続する教員と生徒との関係性がみられる中で、卒業後の報告である『卒業後の生活の充実』、進路が決定後のモチベーションの変化がみられる『目標決定後の生徒の変化』という2つの概念が抽出された。これら2つの概念は進路指導を行った教員の喜びに繋がるものであることから【進路指導のやりがい】というカテゴリーに属するものとした。以下に概念ごとに具体例を示す。

## 『卒業後の生活の充実』

- ・皆が自分なりにちゃんと生き方を見つけて行っているのが一番。高校の卒業証書を持って挨拶に来るとか、大学合格を報告に来るとか、次の就職が決まった話などはとても嬉しいです。(D)

## 『目標決定後の生徒の変化』

- ・進路目標を持ったことで、日頃の学習姿勢が改善されていく生徒を見ると、こちらも応援したい気持ちになる。(F)

以上、5-2でとりあげた【指導における教員の姿勢】【進路指導体制の構築】【進路指導のやりがい】という3つのカテゴリーは、進路指導に取り組む中で教員自身が身につけるものであることから《進路指導での教員の学び》という上位のカテゴリーに統括した。

## 5-3 キャリア教育の課題

1・2年生で行ったキャリア教育の学習が進路選択等に繋がる困難さを述べた『キャリア発達に繋げる難しさ』、キャリア教育がどのようなものかという意識に差がある『キャリア教育の位置づけ』という2つの概念が抽出された。これら2つの概念は、キャリア教育の中身に触れるものであることから【キャリア教育

の課題』というカテゴリーに属するものとした。

概念間の動きとしては、前述の『将来への夢や考えがない現実』という生徒の実態が、キャリア教育に取り組む上での『キャリア発達に繋げる難しさ』の要因であることがうかがわれた<sup>8)</sup>。以下に概念ごとに具体例を示す。

## 『キャリア発達に繋げる難しさ』

- ・職場体験等をして、ついつい目先の高校進学にしか生徒達の考えが及ばない。将来、どうしたいという~~こともあまりなく、とりあえず高校に行くという生徒が多数という中<sup>8)</sup>。色々な方向性をこちらが示しても、なかなか難しい。(D)~~

## 『キャリア教育の位置づけ』

- ・学校の体制としてキャリア教育を推進するのが構築されているのは大きいです。(B)

以上5-3で取り上げた2つの概念は【キャリア教育の課題】であり、キャリア教育を進める中での現状に関わるものであることから、《キャリア教育の現状》という上位カテゴリーに統合した。

## 6. 総合考察

義務教育修了まで、順当に上の学年へとスライドしていくという9年間を過ごしてきた中学生は、中学校卒業を前にして、初めて自分の進路を選択する岐路に立たされる。自らの進路選択に主体的に取り組めるか否かは、中学校時代に将来への希望や目標を持てるかどうか大きく関わっている。

前者には、中学時代の部活動を熱心に行い高校でもさらに発展させたい目標を持つ生徒、1・2年で実施されたキャリア教育での学びに影響を受け、将来への夢へと繋ぐ生徒、高校生活の目標を明確に持ちそれが叶えられる学校を自ら探索する生徒が含まれる。後者は、中学時点でまだ将来の夢が持てず、青写真が描けない生徒である。将来を見据えた自分の考えがないために、塾の意見に左右され、親の意向のままに進路決定をしていくケースが多い。塾の指導や保護者の考えには、偏差値で示される入学難易度による序列重視が感じ取れる。

こうした偏差値重視の傾向を生む要因の一つとして、「入試自体が知識偏重で、個人の判断力や思考力を問うような問題はまだまだ少ない(C)」という現場教員の声がある。日常の授業の形態として、「主体的対話的な深い学び」が推奨されつつも、高校進学の入試制度ではまだまだ知識が重視されるところが多

く、多面的な評価を取り入れた入試制度は確立されていない。

そんな現状においては、3年生で行う進路指導も、高校進学という直近の進路に目がいきがちになり、その先を見据えた指導までには至らないことが多い。今後は思考力、判断力を問う入試のあり方等、入試制度や評価のあり方等の抜本的な改革が望まれる。

### 6-1 キャリア教育への認識

「キャリア教育の全体計画・年間指導計画とも、約8割の中学校で作成されている」(国立教育政策研究所 2013)といわれるが、「毎日の活動を振り返る余裕がなく、生き方指導という言葉自体も現場ではあまり使わないのが現状(E)」「生き方指導を問う学習、将来に繋がるようなものを本当はしたいのですが・・・。(C)」という教員の声があがる等、一部の職場ではキャリア教育が根付いていない実態がうかがわれる。

その要因の一つに、教員のキャリア教育の捉え方があると考えられる。つまり、教員の認識として、何がキャリア教育なのか漠然としており、教育実践におけるキャリア教育の視点が意識化されていないのである。職場体験のような地域社会と連携し働く取組も重要である。ただ大々的な取組でなくとも、中学校現場には、毎日の学級活動や生徒会活動(委員会活動)、清掃・給食等の場面では、各々に役割が与えられ、個人の責任を果たすべき機会がある。他者との協同が必要な場において、自分の役割を考え、その責任を果たし、自分の役割が集団の中でどう影響しているのか、どんな価値があるか等を考えさせる活動は、キャリア教育の中核をなすものである。

このように、日常の教科指導や特別活動においても、将来の生活や社会と関連付けるキャリア教育の視点を持ち、キャリア発達の促進に結びついているかを検討していくことが肝要であると考えられる。

### 6-2 体制の確立

キャリア教育を推進するには、学校の体制が大きく関係している。コロナ禍でも実施した様々な取組の中で、とりわけ目を引いたのは企業のキャリアプログラムから学びを取り入れる等、新しいキャリア教育への

挑戦である。「コロナ禍であるけど、さすがに職場体験しないままで終わらすのは違うなあと思って、夏の間色々探したんです。(B)」というキャリア教育担当の教員の「学校にキャリア教育を推進するという体制が構築されているのは大きいです。体制として確立しているとやらざるを得ないです。」という言及は、一個人の教員の努力というよりも、3年間を通してキャリア教育をおし進めるという体制の構築がなされていることをうかがわせた。

## 7. ま と め

今回は現場教員の進路指導の捉え方を M-GTA の方法で分析をした。将来に向けて目標を持った主体的な生活を送るためにも、進路選択では自ら納得した自己決定が重要という教員の考えが確認された。

今後は、キャリア教育の意義をおさえ、その視点を持ちこみながら、日常の学級活動など特別活動に取り組んでいこうとする教員の姿勢と共に、キャリア教育を組織的に推進する校内体制の整備がどう発展していくのかについて継続して検証していきたい。

### 謝 辞

本研究に当たり、5校の中学校教員の皆さんに貴重な時間を割いていただきました。インタビューにご協力いただき、心より感謝申し上げます。

### 参 考 文 献

- 1) 文部科学省(2004)「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」
- 2) 林尚示, 服部伴文, 村木晃(2013)「生徒指導・進路指導の理論と方法」春風社
- 3) 中央教育審議会 答申(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
- 4) 文部科学省(2017)中学校学習指導要領解説 総則
- 5) 国立教育政策研究所(2019)「令和元年度(平成31年度)職場体験・インターンシップ実施状況等調査実施要領」
- 6) 木下康仁(2003)グラウンデッド・セオリー・アプローチ-質的実証研究への誘い-, 弘文堂
- 7) 国立教育政策研究所(2013)「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第二次報告書中学校調査結果の分析」